

# 『平家物語』の中学国語古典教材としての可能性

田中 幹子  
加藤 兼司

はじめに

前年度から中等国語教育における古典教材の取り扱い方について調査し、古典教育の可能性について私見をのべてきた。<sup>\*1</sup>

本稿は、古典教材のうち、中学二年のすべての教科書でとりあげられている『平家物語』について考察していきたい。本稿は、今年度の共同研究者である本学四年の加藤兼司君の調査報告を軸として考察、私見をのべる形をとったので、共同執筆者とした。

## 一、『平家物語』の文学史的意義

『平家物語』は、平清盛を頂点とした、平氏の二十年あまりの隆盛と衰亡を、「あはれ」を基調に「語り」によって伝えたものである。因みに『平家物語』の「あはれ」は

\*1 田中幹子・及川貴大「中等国語教育における古典作品の取り扱い方について(1)」(『札幌大学総合論叢』第26号2008年10月)。

それ以前の作品の「深い情趣」の意というよりも「愛惜」の意に重点を置く。以後の作品では、「あはれ」はこちらの意にとられることが多くなる。

元久二（一一〇五）年〜承久元（一一一九）年頃に成立したとされている。これは、壇ノ浦の戦から約三十年後にあたり、人々の脳裏にきらびやかで豪華だった平氏の面影が残っている時期である。

承久元（一一一九）年には源実朝が暗殺された。政権は、平氏を滅ぼした源氏から北条氏に移った。慈円が『愚管抄』で記した「武士の世」は、貴族になろうとした平氏の時代を経て、鎌倉幕府という京の支配から開放された新しい権力機構が実態となっていた。

現実逃避とも見える研ぎ澄まされた感覚で王朝への憧憬と追憶の心を詠んだ『新古今和歌集』が元久二（一一〇五）年、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」と万物の無常と流転を主題に、遁世者鴨長明が地震・天変地異にまどう人々を記録した『方丈記』が建暦二（一一二二）年に成立した。

人々は、「永遠に続くものなど何もない」という「無常」を実感していた。だからこそ、『平家物語』が語る一瞬の命の煌きを尊び、不条理な世界に懸命に生きた人への強い愛惜と共感を持ったのである。

『平家物語』の成立背景については、『徒然草』（二二六段）に、信濃前司行長が、慈円の庇護の下、『平家物語』を作り、盲目の生仏に教えて語らせたという話がある。

貴族社会の大政治家である慈円が庇護したということに、政治的な意味があるように思えるが、本稿では『平家物語』が読み物としてではなく琵琶法師の語りによって普及

\*2 本稿引用古典本文は全て小学館『新編日本文学全集』による。

したことに注目したい。

この時期、唱導文芸の萌芽が見られた。生仏も唱導を生業とする法師であったろう。著名な朗詠漢詩句や和歌をちりばめた七五調の和漢混淆体の文章は、哀切な琵琶法師の調べにのることによって、叙事的、劇的な人間感情の起伏が強調される。『平家物語』の真髓は、語りものとしての流動的文学であるという点にある。

そしてまさにこの「語りもの」という『平家物語』の最大の特徴こそが、「音読」重視の中学国語教材としてすべての教科書に選ばれた理由であろう。続いて加藤兼司君による中学国語学習指導について報告してもらおう。

## 二、中学二年生教材『平家物語』について

『平家物語』は、中学二年の国語教科書五社すべてに採用されている教材である。教科書全体の中でも古典に占める割合が、一〇%に満たない中で、数少ない『平家物語』は貴重な古典素材であり、二年次に学習する代表古典である\*。

『平家物語』は、「灌頂の巻」を含め、全十二巻あるが、中学教科書に採用されているのは、専ら、冒頭の「祇園精舎」の紹介以外は、平氏の衰運を描いた巻九の「敦盛の最期」と巻十一「那須の与一」である。なぜ、この章段が選ばれたかについては、加藤兼司君による各教科書の「学習指導書」を手がかりに、中学の現場で『平家物語』がどのように教えられているかについての調査を紹介した上で考察したい。以下加藤兼司君の執筆。

\* 3 (一) 拙稿参照。

『平家物語』が学校現場ではどう扱われているか。今回は中学二年生の教科書の中の『平家物語』を対象とし、中学二年の国語の教科書として使用されている五社（『国語2』光村図書、「中学校国語2」学校図書、「新しい国語」東京書籍、「現代国語2」三省堂）「伝え合う言葉」教育出版）の教科書と指導書を取り上げ、どのように『平家物語』を生徒に教えていくのかを示す。そして各々の特徴を挙げていく。

まず学習指導要領から第二学年の古典指導の部分を示す。

古典に関することは、学習指導要領「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に記載されている。

(1)「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、

次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

(ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。

(イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

(ア) は、作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむことをしめしている。

古典の世界を楽しむためには、生徒が古典の世界に積極的にかかわれるように工夫することが大切であり、作品の特徴を生かして朗読することは効果的な学習

である。

朗読するに当たっては、現代語訳や語注などを手掛かりにして作品の内容を理解するとともに、そこに描かれている情景や登場人物の心情などを想像しながら読むように留意する。また、第1学年では音読を通して古典特有のリズムを味わう学習をしてきたことが生かされるようにする。朗読の仕方を工夫したり他の人の朗読を聞いたりすることで、作品について新たな発見をしたり興味・関心を深めたりすることがある。このような発見や興味・関心を適切に取り上げ、生徒が古典を一層楽しいものと思えるようにすることが重要である。

(イ) は、古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像することを示している。

「古典に表れたものの見方や考え方に触れ」るためには、例えば、古典の易しい現代語訳や古典について解説した文章を用いたり、関連する本や文章等を紹介したり、音声や映像メディアを活用したりするなど指導上の様々な工夫が考えられる。「古典のものの見方や考え方」の中には、長い年月を隔ててもなお現代と共通するものもあれば、現代とは大きく異なるものもある。それに気が付くことが古典を学習する大きな楽しみであり意義である。

「古典に表れたものの見方や考え方に触れ」ることと「登場人物や作者の思いなどを想像する」ことは密接に関連しており、登場人物や作者の思いを豊かに想像することを通して、文章を貫くものの見方や考え方に触れることもある。教材とする文章の特徴を生かしながら指導を工夫することが大切である。その際、

「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」3の「(5) 古典に関する教材については、古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章などを取り上げること。」に留意する。

改訂前の「言語事項」を「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と改め、「C読むこと」の配慮事項として示されていた「古典」の指導を、三領域の指導を通して指導すべき事項として「A 伝統的な言語文化に関する事項」に位置付けしている。第二学年の「伝統的な言語文化に関する事項」には(A)、(イ)の二つの要素が求められている。

このことから、古典指導は「読むこと」だけではなく、「話すこと」「話すこと・聞くこと」「書くこと」の三領域の関連を考えながら指導していくことが求められていることがわかる。

では、この指導要領に基づいて現場ではどのように古典を教えているかを、教科書とその指導書を読み込むことで考えていきたい。

表の説明をする。中学国語教科書は全国で五社が発行している。調査はこの五社を対象とし、五社すべてが中学二年で取り扱っている『平家物語』を調査した。『平家物語』の内容を表で比較した。(平家物語教材記載目的)の項には五社それぞれが指導書に記載している章段の目的を抜粋した。(特徴)に、教科書と指導書を合わせて気づいたそれぞれの特徴をまとめた。なお、この表の並びは、上にいくにつれ内容読解を重視、下にいくにつれ音読が重視のものになっている。

出版社 書籍名	章段名	『平家物語』教材掲載目的	特徴
光村図書 国語2	・ 祇園精舎 ・ 那須の与一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 登場人物の心情を想像し、古人のものの見方や考え方にふれる。</li> <li>・ 独特のリズムを味わい、音読を工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「扇の的」だけでなく、「那須の与一」の章段を掲載。</li> <li>・ 鑑賞が目的。</li> </ul>
学校図書 中学校国語2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祇園精舎</li> <li>・ 敦盛最期</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 『平家物語』の中の「祇園精舎」「敦盛の最期」の原文を繰り返し音読することによって、語りの文体に親しむ。</li> <li>・ 「敦盛の最期」を、場面展開、人物像、人物の心情（特に直実の葛藤）を中心に読み取る。</li> <li>・ 『平家物語』が更新と再生によって継承されてきたものであることを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「灌頂の巻」の説明文が掲載。</li> <li>・ 教科書がB5判。</li> </ul>
東京書籍 新しい国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祇園精舎</li> <li>・ 那須の与一</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朗読を通して、古典のリズムと表現の特徴を味わう。</li> <li>・ 場面の状況を読み取り、人物の心情について話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 『徒然草』『那須の与一』『論語』と三作品を関連づける。</li> <li>・ 絵巻がリンク。</li> <li>・ 「祇園精舎」全文掲載。</li> </ul>
三省堂 現代の国語2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祇園精舎</li> <li>・ 敦盛最期</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 戦いの場にある登場人物の考え方や生き方について考える。</li> <li>・ 仮名遣いや語句の意味に注意しながら、文章の調子をとらえる。</li> <li>・ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「グループ学習を中心に考えを交流し合う力を高める事例」</li> <li>・ 「セリフを中心に繰り返し朗読し、古典を読み味わう事例」</li> </ul>
教育出版 伝え合う言葉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祇園精舎</li> <li>・ 那須の与一</li> <li>・ 敦盛最期</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古文と漢文の共通点や相違点に気づく。</li> <li>・ 古文や漢文の口調に慣れる。</li> <li>・ 当時の人々の考え方を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 音読・朗読がねらい。</li> <li>・ 言葉の響きに興味をもつ。</li> <li>・ 図や絵が多数掲載。</li> </ul>

次に表にまとめた五社それぞれの特徴を説明する。

## 「国語2」光村図書

五社の中で最も内容読解を重視している。この社の姿勢が最もよくあらわれているのが注である。注には「登場人物の心情を想起し、古人のものの見方や考え方にふれる」という指摘がなされ、今まで「那須の与一」が本来の姿として扱われていなかったことを指摘している。「那須の与一」を単に賞賛の話とせず、歎喜のあまり戦いの中、舞をする平氏と、舞をした「年五十ばかりの男」を射殺してしまう源氏の両者の背景を解き明かしていくとしている。源平両者の文化の違いや相反する行動がなぜ起きたのか、まですみ取ることが求められている。『平家物語』の根底を生徒に指導することが特徴の一つとなっている。

「音読」に関しての特徴は、「平曲」は時代とともに練り上げられたものと明示している点である。「独特のリズムを味わい、音読を工夫する。」に『平家物語』は、文字として読むものではなく、人に聴かせる弾き語りものであったことを理解させることとしている。「語りもの」の真の内容理解のためには「音読」は欠かせないとし、「音読」の繰り返しが内容理解につながるとしている。以上、光村図書は『平家物語』の深い内容理解を指導することを目的としているのが特徴である。

## 「中学校国語」学校図書

特徴は、生徒自身が『平家物語』を自ら学習を望んだ時に役に立つ教材になっている



ことである。

そのため、『平家物語』の第一巻「祇園精舎」から始まり、「敦盛の最期」そして最後の巻「灌頂の巻」と『平家物語』全体を見通すことができるようにしている。巻と巻の間には歴史的背景の説明なども書かれており、生徒が興味を持てば、自己学習に繋がるような糸口がつけられている。この社だけがサイズがB5判の旧体となっている。紙面に限りがあるため図説が少なく、読むことに抵抗がある生徒にとっては『平家物語』の世界観が感じにくい。いかに教師が自分で理解し、わかりやすい形で生徒に『平家物語』を伝えられるかが試される教材になっている。

もう一つの特徴としては、学習目標の一つに「『平家物語』が更新と再生によって継承されてきたものであることを理解する。」を挙げていることである。元来、『平家物語』は琵琶法師により伝えられてきたものであった。そのため、多くの人に語るために琵琶法師が場に合わせて脚色や自身の解釈を交えつつ伝えていた。ゆえに『平家物語』にはオリジナルはなく、時代の流れとともに変化していった文学である。この伝承の特徴は「更新と再生」として生徒が理解することを目標としているのである。

### 「新しい国語」東京書籍

特徴は、『平家物語』一教材だけではなく、他の古典教材も合わせ単元全体を通して古典を指導するような意図で構成されていることである。単元の目標「古人のものの見方や考え方にふれること」としていることからその意図がわかる。古典の単元の三部構成を一見関わりのない三作品を繋げることによって古典を指導する意図がみえるのであ

る。

まず、作品の成立年順序が逆になるのにもかかわらず、『徒然草』（第九十二段）「或人、弓射る事を習ふに」がおかれている。その内容は弓が「二本あって、初めの一本で命中させる気でない」と、そこに油断がでる。」というものであり、「那須の与一」の一本の矢に己の命運を賭けて矢を射る話につながる配置となる。そして、最後には孔子の『論語』で古人から受け継がれた教訓や歴史の尊さが書かれ、この単元全体が統一感のある構成となっている。

他にも絵巻を載せるなどの工夫があり、特に「那須の与一」では、物語の進行と絵巻場面をリンクさせ、生徒がイメージしやすいようにしてある。また、原文の前後には補助的に「那須の与一」の背景も説明されている。「祇園精舎」は東京書籍だけ全文を掲載してあるのも特徴といえる。学習目標「平家物語の世界観・人生観に迫る」から、『平家物語』全体を生徒が知り、内容理解もさせることにも繋がる。

### 「現代の国語2」三省堂

この書の最大の特徴は集団による教授方法にある。グループディスカッションをして『平家物語』を理解していくことが指導書には挙げられている。そのために「グループ学習を中心に考えを交流し合う力を高める事例」「セリフを中心に繰り返し朗読し、古典を読み味わう事例」の二つの事例を挙げている。班に分かれ、話し合いすることによって、内容を深めていくことを目的とし、生徒間で意見交換することで、伝え合う能力を高めたり、他者の意見から内容をより理解していくことがねらいとなっている。

「音読」も同様に班に分かれ、生徒間で音読・朗読を繰り返して行うとしている。古文や漢文の独特のリズムや口調を体感し熊谷や敦盛の心情に深く迫ることをねらいとしている。

### 「伝え合う言葉」教育出版

特徴は目的を『平家物語』の目標を鑑賞ではなく「音読」としていることである。

「当時の人々の考え方を知る」ための本作品の具体的教授法は「本教材は、音読・朗読することに重点を置くため、全ての作品について詳しく読むことは時間的に不可能である。そこで、細かな語釈や文法上の知識の学習を最低限におさえ、現代にも通じる故人の心に触れながら読むことが大切となるであろう。」とし、音読・朗読を通して口調に慣れ言葉の響きに興味を持つことがねらいとなっている。

教科書もやはり古典、雰囲気の世界を感じさせることを目的とした教材となっている。色彩も豊富であり、絵を沢山載せて生徒に興味を持たせるような配慮がされている。参考項目である「みちしるべ」「よしみち」にもグループで分担を決め、朗読をすることが課題となっている。(以上加藤兼司執筆)。

続いて、これら教材として取り上げられた『平家物語』の章段を解説する。

### 三、取り上げられている章段解説

#### 1：祇園精舎

すべての教科書にとりあげられているが、全文掲載は、加藤君の指摘のとおり東京書籍のみである。『平家物語』冒頭は、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。」という流麗な七五調の美文の調べにのって、人の世の無常を感得するように語句がたくみに配置されている。「おごれる人」「猛き者」が久しからず滅びるといふ盛者必衰だから諸行無常であり、人間の力ではどうしようもないから阿弥陀如来を信仰して極楽浄土を願うというのは、『平家物語』の主題である。哀調を帯びた美文の底には、慰霊の祈り、死者の魂の鎮魂がある。

しかし、掲載の目的は、このような主題の追求ではなく、暗唱に適した著名な冒頭の紹介とともに『平家物語』の雰囲気を感じさせることであろう。

#### 2：巻九「敦盛最期」

能『敦盛』（世阿弥）『生田敦盛』（金春禅鳳）、幸若舞『敦盛』、浄瑠璃。歌舞伎『一谷フタバ軍記』で知られる『平家物語』の中でも最も著名な章段である。

寿永三（一一八四）年二月一ノ谷の戦いで敗走した平家の公達が海上の助け舟に逃れようとするところを、老武士である熊谷次郎直実が「あッぱれ、よからう大將軍にくま

ばや」と探し、華麗な衣装に身を包んだ公達を呼び止める。しかし見れば、我が子小次郎と年も変わらぬ美少年であった。思わず不憫になり、「名のらせ給へ。たすけ参らせん」と声掛けすると、少年は「なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとって人に問へ。見知らうずるぞ」と毅然と言いつつ。やがて味方が目前に迫り、直実はもはや逃がせないと覚悟し、「目もくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえ」ながらも、美少年を「泣く／＼頸をぞかいてンげる」。

老いと若さ、粗野と華麗、親と子というすべてにおいて対照的な二人に、戦場という緊迫した非情な場で一瞬の心の交流が起きる。人としての情愛、武士として生きなければならぬ現実、その矛盾の中での葛藤は、この場面の内容さえわかれば十分生徒に伝わる。

しかし、指導者の知識として、二つ前「一二之懸」の章段に描かれていた直実が、一族の生き残りのために功名にあせる老武士として描かれていることを紹介し、戦場の場こそがすべてと焦る気持ちを生徒に理解させれば、敦盛を逃がそうと思ったことがいかに破格であるかがわかる。

さらに章段の後半の亡骸から発見された錦に包まれた名笛「小枝」に直実が「東国の勢何万騎あるらめども、いくさの陣へ笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」を紹介し、生死のかかわる場においても雅を忘れない姿勢を敬意を持って描かれていることを伝えたい。

表現技術としても熊谷と敦盛を対照的にしかも魅力的に描いていることにも言及してほしい。当時、平家の公達は公家化し鉄漿おほぐらに薄化粧おほぐらであり、絢爛豪華な衣装を身にまとう貴族であった。一方、直実は、この戦で成り上がりとする野武士である。視覚的に

もまったく対照的であり、しかも時代は、粗野が雅を駆逐する「武士の世」であった。その時代の力によって、雅な文化が散っていく。

本来は、同じ武士でありながら、『平家物語』では、貴族文化を体現するものとして平家の公達が、武士ものぶによって美しく散る。命もあやうい状況でも、和歌へ執着（巻七「忠度都落」・巻九「忠度最期」）、敦盛の青葉の笛のほかにも琵琶への執着（巻七「経正都落」）など、風雅を忘れない平家公達に寄り添うような立場で描いている。『平家物語』の主題が亡びの美である所以であり、指導者がそのような意識を持って指導すれば、親子の情以上の読み取りが、生徒も言葉にならなくとも感ずることができるのではないだろうか。

### 3：巻十一「那須与一」

元暦二（一一八五）年正月、義経は、屋島に平氏を追討にむかった。海上に逃れる平家は、義経隊が、七・八十騎しかいないことがわかると猛反撃にでた。平教経が義経をねらった矢が、義経をかばった佐藤嗣信が矢を受け命を落とした。そのうち源氏に帰服しようと四国の武士が集まり、三百騎にふくらんだ。夕暮れとなり、両者膠着状態のまま両軍引き上げたところ、沖合いの平家軍から、豪華に飾り立てた舟が一艘進み出た。そこには、正装した女房が乗っており、先端に紅に金の丸の扇をつけた竿を立て、源氏軍に手招いた。

その挑発を受けてたった源氏軍の名譽を担う大役を仰せつかったのが若干二十歳の那須与一だった。濃紺に赤の錦の鎧直垂、萌黄緘の鎧に身をつつみ、薄色の切り斑に鷹の

羽を加えた鹿の角製の鏑矢を背負っていた。

凛々しい若武者が、絶対に失敗が許されない場面で、一本の矢に己の命と一族の名譽をかけ「南無八幡大菩薩、我國の神明、日光権現、宇都宮、那須のゆげん大明神、願わくはあの扇のまんなか射させてたばせ給へ。これを射損ずる物ならば、弓きり折り自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度本国へむかへんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふな」と念じ「ひやう」と矢を放つ。生徒は、与一の心境を、世界大会のスポーツの試合の強烈なプレッシャーの中、一発勝負にかける選手のように理解するであらう。そして、見事矢は扇を射止め、夕焼けの海に扇の金丸が輝きながらはらはらと舞い散っていく。平氏が船端を、源氏は箆をやんやと叩き、その美技を讃えた。

一見、生徒は、緊張感の中、重圧を撥ね退ける与一の姿に一流のスポーツ選手の試合をみるような気持ちになるかもしれない。血なまぐさい戦場であることを両軍が一瞬忘れ、与一の美技に酔いしれているように見える。しかしこの場面は、そのような優美な場面ではない。酔いしれたのは、戦場よりも宮中が似つかわしい平氏だけだった。源氏は、いかなる時も、勝機を逃さなかった。

与一の美技の余韻の中、平氏の五十くらいの男が興に乗って長刀を持って舞い踊る。それを見た義経は与一に射殺すことを命じ、与一は今度は殺す目的で「首の骨をひやう」と矢を放つ。舞っていた男がいきなり舟底にまっさかさまに落ちる姿に平氏は声も出ない。一方、源氏は箆を叩き、どよめいて喜ぶ。あつという間に、また戦闘開始となり、源氏方の大勝利となる。

ここでは、殺戮こそが戦と思ひ、戦場が一族隆盛の唯一の場であるという源氏側の地

方武士としての生き方と、平安貴族としてどこまでも雅を求める平氏のコントラストを伝えるべきであろう。

以上、章段内容と、望ましい指導内容を述べてみた。現実には、ここまで踏み込んで教えることは難しいと思えるが指導者の作品理解は必要であろう。次に、現場では文部科学省の指導、またその指導の下、各社がこれらの章段から何を教えたいかが、時代とともに変化が見られることに注目したい。

文部科学省では、平成二十年に学校教育法施行規則の一部改訂と中学校学習指導要領の改訂を行った。次に、再び、加藤兼司君に学習指導要領の変遷を報告してもらおう。

#### 四、学習指導要領の改訂

改訂にあたり注目するのは、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されたことである。近年、国際社会の中で生きていくためにも自国の古来からの文化の教育が問われ、古典指導が見直されたことがきっかけとなっている。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設置されるまでの学習指導要領の変遷を調査していく。

#### 平成元年の学習指導要領の改訂

この時期は、国民生活の向上、国際的地位の向上、科学技術の向上、学校の教育の急速な向上にともない、高等学校の進学率が九〇%を超えた。学校教育が知識の伝達の傾



向に偏っていることを改め、自ら考え、行動する児童・生徒の育成を目指している。国語科の目標は次の通りである。

「国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」

国語科を通して生徒が自ら発展させられるように指導することを目的としている。古典指導については中学校学習指導要領の第3「指導計画の作成と内容の取扱い」の(6)に次のように記載されている。

古典指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。その教材としては、古典に関心を持たせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにすること。

平成元年の古典指導は昭和六十二年に教育課程審議会の答申の中で「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」と改善のねらいの一つとされた。「伝統について関心を深める」「音読を通して文章の内容や優れた表現を味わう」

など国際社会の中において自国の文化を理解しなければならないことが反映されている。

### 平成十年の学習指導要領の改訂

この時期の社会では情報化、高齢化・少子化などが問題となっていた。特徴であった。教育現場は、受験戦争、いじめや不登校の問題、社会体験の不足などの課題があった。これらのことを踏まえ、平成十年の学習指導要領の目標は次のように規定された。

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」

平成元年の目標では「能力を高め」だったのを平成十年になると「能力を育成し」に変更されていることがわかる。平成元年から平成十年の間に国語を適切に表現し正確に理解する能力がなくなってしまうことがうかがえる。これの打開策として、個性や豊かな人間性を育成することが課題となった。それが「ゆとり」教育である。授業時数を減らして、生徒自ら考え、行動する力の「生きる力」の育成が推進された。授業時数は次のとおりである。

平成元年	第1学年	175	第2学年	140	第3学年	140
平成十年	第1学年	140	第2学年	105	第3学年	105

この中で「の古典指導に関わるものは中学校学習指導要領の第3の「指導計画の作成と内容の取扱い」の1の(4)のイに次のように記載されている。

古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。その教材としては、古典に関心を持たせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにし、文語における言葉のきまりについては、細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲の指導にとどめる。

古典の指導に関しては、生徒が古典を別の世界のものと思わず、自国の文化であると認識することが求められている。そのために、教師は古典に生徒に関心を持ってむかわせるような指導をすることが課題となることがわかる。

#### 平成二十年の学習指導要領改訂

現行の学習指導要領の古典指導について書いていく。

まず国語の目標は平成十年の目標と同じである。今回の改訂では古典指導が大きく変わったことが注目とされる。それは、「言語事項」を「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と改めたことである。これには、大きく分けると「話すこと・聞くこと」

「書くこと」及び「読むこと」の指導と「書写」に関する指導がある。第3の「指導計画の作成と内容の取扱い」には次のようにある。必要な個所のみ抜粋する。

1 (1) 各学年の内容の指導については、必要に応じて当該学年の前後の学年で取り上げることができること。

(2) 各学年の内容の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について相互に密接な関連を図り、効果的に指導すること

2 (1) 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の指導を通して、「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。」「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。」について指導する。については次のとおり取り扱うこと。

ア知識をまとめて指導したり、繰り返し指導したりすることが必要なものについては、特にそれだけを取り上げて学習させることにも配慮すること。

イ言葉の特徴やきまりに関する事項については、日常の言語活動を振り返り、言葉の特徴やきまりについて気付かせ、言語生活の向上に役立てることを重視すること。

これにより古典指導が明確化され、自国の文化の指導を重視することになった。さらに各学年に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が記載され、中学校三年間で古典を身につけさせる具体的な指導目標が記された。

### 五、教科書別学習指導書の変遷

では、改訂前はどんな古典指導がもたらされたのか調査し、比較していきたい。平成九年に使用された「中学校国語2」光村図書「中学国語2」教育出版「新しい国語2」東京書籍の三社の教科書、指導書を対象として調査していく。

出版社 書籍名	章段名	『平家物語』掲載目的	特徴
光村図書 国語2	那須の与一	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本人の伝統的季節感やリズム感を根底におくというところで古典単元と関連をもつ。</li> <li>本単元「思いをつづる」で学ぶ季節感を、現代人の感覚と比較したり「扇の的」の七五調などについて注意を喚起したりして興味・関心を深めさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「那須の与一」章段にいたるまでの経緯が掲載。</li> <li>当時の衣装、武器、馬の図説が掲載</li> </ul>
東京書籍 新しい国語2	木曾の最期	<ul style="list-style-type: none"> <li>我が国の代表的な軍記物を読み、古典への興味や関心を増す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「木曾の最期」章段にいたるまでの経緯が掲載。</li> <li>「木曾の最期」の舞台の地図が掲載。</li> </ul>
教育出版 中学国語2	祇園精舎 敦盛の最期	<ul style="list-style-type: none"> <li>昔の物語に親しみ、武士の生きた時代とその生き方について考える。</li> <li>繰り返し音読し、物語の鑑賞を深めるとともに古文の口調に慣れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『平家物語』冒頭の「祇園精舎」が掲載。</li> <li>「敦盛の最期」の原文に補助的に部分現代語訳が付けている。</li> </ul>

表にまとめた三社を説明し、現在使用されているものと比較していく。

### 「国語2」光村図書

光村図書は内容平成九年の指導書から読解を重視している。教材研究もやや専門的であることがわかる。平成九年の教科書には詳しい図説や絵が掲載されている。ここからも深い内容理解を求めていることがわかる。音読・朗読もただ古典に親しむためだけのものにとらえず、語りものである『平家物語』を真に理解するために必要だとしている。平成九年では「那須の与一」のみだった。

### 「新しい国語2」東京書籍

この書が最も大きな変化がみられる。平成九年で取り上げた教材で唯一「木曾の最期」を取り上げている。古典の学習の目的を鑑賞としている。「木曾の最期」は人間性豊かな、感動的なドラマとして描き出しているので選んだとしている。舞台の地図や大津市の写真なども掲載してイメージを持たせる意図がみえるが、あまりよくない。

一教材で作品の理解が難しいと判断したためなのか、前途のとおり現指導書では『徒然草』『那須の与一』『論語』と話をつなげて単元全体で古典を理解させようとしている。

### 「中学国語2」教育出版

平成九年の教科書の中で唯一「祇園精舎」も取り上げている点の特徴である。現教科書では「敦盛の最期」に加え「那須の与一」が掲載される。掲載方法も「敦盛の最期」

原文の現代語訳をすべてをのせず、部分的につけられている。このことから音読・朗読重視がうかがえる。教育出版社は旧教科書から音読・朗読の重視がいわれている。

全体を通してサイズが現教科書は三社全てA4判なのに対し、旧教科書はB5判である。B5判は文字スペースにゆとりがなく、資料が読み取りにくい。改訂により古典指導が重視された現在では、親しんでもらうための工夫として見やすさを取り入れたことがわかる。

旧教科書で「祇園精舎」教材を取り入れているのは三社中一社である。しかし現教科書では「祇園精舎」を取り上げていない出版社はない。これは大きな変化である。冒頭部の「祇園精舎」はまさに『平家物語』全体を象徴する一段目である。これを教材として加えるのは、『平家物語』の一部の話をするのではなく、『平家物語』自体を指導することが求められていることがわかる。

指導書に関しても古典指導の重視がうかがえる。旧指導書と現指導書を比較すると、『平家物語』教材でどう授業を進めていくかが指導案事例などかかれてあり、明確になっている。教材研究の項目も比較すると、現教科書の方がわかりやすく掲載されている。このような教科書の変化だけでなく、指導書の変化があるのは指導する教員側も古典への深い理解が求められていることがわかる（以上、加藤兼司君執筆）。

## 終わりに

以上、『平家物語』を通して、中学古典教育の変遷を見てきた。学習指導要領の下、各社がそれぞれの特色を出して、よりよい古典教育を模索している様子が学習指導書からも十分伺えた。また、ゆとり教育が見直され、グローバルが故に自国を語れる人間が望まれる中、今後の学習指導要領からは親しむという感覚的なものだけでなく、古典の知識を身につけることで日本文化を意識させようという姿勢が予測される。今後はそれに現場が答えるだけの古典知識を身につけた教員の育成が必要であろう。